

イギリスの発達心理学の歴史と現状[†]

子 安 増 生

Developmental psychology in Great Britain :
Its short history and the present situation

KOYASU Masuo

筆者は、1994年3月から1995年1月まで文部省在外研究員としてイギリス（連合王国）に滞在し、発達心理学の調査研究を行なった。本稿は、筆者が垣間見たイギリスの研究機関における発達心理学研究の現状について、その歴史の変遷のスケッチを交えながら、以下に報告したい。

1. イギリスの心理学研究小史

●イギリス心理学の淵源

現代心理学は、1879年にドイツのヴント（Wundt, W., 1832-1920）がライプツィヒ大学に世界最初の心理学実験室を設置したことから始まるとするのが定説となっている。それでは、イギリスの心理学は、いつどこにその淵源を求めうるであろうか。イギリスにおける心理学実験室開設については、ロンドン大学ユニヴァーシティ・コレッジ（University College, London; 略称 UCL）とケンブリッジ大学との間で競われ、1897年に両大学でほぼ同時に行なわれたとされる。他方、イギリス最古の高等教育機関のオックスフォード大学は、保守性が強かったため心理学の近代化に遅れをとった（今田, 1962）。

現在、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、ロンドン大学の3校は、しばしば「黄金の三角形 golden triangle」と並び称されている。しかし、イギリスの心理学の草創期の歩みに UCL が果たした役割はとりわけ大きいと思われる。そこで、ユニヴァーシティ・コレッジ当局が発行している UCL の通史、*"The world of UCL: 1828-1990"* (Harte & North, 1991) を参考にしながら、イギリスの心理学の歴史を探る旅を UCL から始めることにしよう。

[†] ロンドン大学ユニヴァーシティ・コレッジのエイドリアン・ファーナム (Furnham, A.) 教授, MRC 認知発達ユニットのアネット・カーミロフ＝スミス (Karmiloff-Smith, A.) 教授, オックスフォード大学のピーター・ブライアント (Bryant, P. E.) 教授に対し、心理学史に関する資料を教示していただいたことに感謝申し上げます。

また、この報告は、筆者の属する学科の先達である菅阪良二名誉教授がかつてイギリスでの在外研究より帰朝後、報告の論文（菅阪, 1957）を書かれた囑みに倣うものである。

●ロンドン大学ユニヴァーシティ・コレッジ

ユニヴァーシティ・コレッジ (図1a 参照) は、スコットランド生まれの詩人トマス・キャンベル (Campbell, T., 1777-1844) らの急進主義者、功利主義者、非国教徒らが中心となり 1826 年に創設された。その後ロンドンに設立された幾つかのコレッジがロンドン大学に発展していった結果、ユニヴァーシティ・コレッジはロンドン大学で最初に設立されたコレッジということになった。

功利主義哲学者のベンサム (Bentham, J., 1748-1832) は、ユニヴァーシティ・コレッジを物心両面で支援し、最後は自分の遺体を大学に寄付した程であるが、そのベンサムがこのコレッジを「リベラル派連合」と呼んだように、ユニヴァーシティ・コレッジはすべての宗派の学生を許容し、またイギリスで女子学生を受け入れた最初の大学となった。宗教からの独立と自由を謳うユニヴァーシティ・コレッジに対し、英国国教会派は対抗上 1829 年にキングズ・コレッジ (King's College) を創設し、両者のライヴァル意識が長く続いた。

ユニヴァーシティ・コレッジの心理学は、医学者のジョン・エリオットスン (Elliotson, J.) が 1837 年に教授となり催眠の研究を始めたのが最初である。エリオットスンがユニヴァーシティ・コレッジ病院で行なった催眠の公開実験には、作家のチャールズ・ディケンズ (Dickens, C.) も参加したという。1866 年に、ロバートスン (Robertson, C.) はユニヴァーシティ・コレッジの「精神と論理学」講座の教授に就任した。ロバートスンは、生理学の重要性を強調した。ほぼ同じ頃、ジェイムズ・ウォード (Ward, J., 1843-1925) がケンブリッジに精神物理学を研究するための実験室を作ろうとしたが、「人間の魂を秤にかけるような行為は宗教に対する侮辱である」という理由で理事会から拒絶された (1877 年)。そこで、前述のように、ドイツのヴントが先を越して世界最初の心理学実験室を設置したのである。

イギリスで最初の心理学の実験室は、ロバートスンの後を継いだジェイムズ・サリー (Sully, J., 1842-1923) が 1897 年にユニヴァーシティ・コレッジに設立した。ケンブリッジ大学の実験室も、ウォードの努力の甲斐あって、同年に創設された。サリーは、1892 年に第 2 回国際心理学会 (International Congress of Psychology) を UCL で開催し、1901 年 10 月 24 日には、やはり UCL で英国心理学会 (British Psychological Society; BPS) の発会式を開くなど組織的活動を展開したほか、1903 年にはウィリアム・マクドゥーガル (McDougal, W., 1871-1938) をリーダー (講師) に任命した。マクドゥーガルは、種々の本能によって人間の社会的行動を説明しようとする目的論的心理学を提唱したことで知られているが、ロンドン大学の後オックスフォード大学を経て、1920 年にはアメリカに渡り、ハーヴァード大学、デューク大学の教授を歴任した。

●UCL の個人差測定研究の伝統

同じ頃、ケンブリッジ大学出身の人類遺伝学者ゴールトン (Galton, F., 1822-1911) が個人差の測定に関する一連の研究を行ない、1904 年には UCL のある Gower Street に優生学記録事務所 (Eugenics Record Office) を開設した。たとえばゴールトンは、個人の指紋の終生不変性と万人不同性を確認し、1892 年に *"Finger prints"* という本を出版している。ゴールトンのこの研究が、犯罪捜査における指紋の利用への道を開いたのである。

ゴールトンの優生学の理論と個人差測定の考え方は、ロンドン大学の応用数学・力学の教授

だったピアスン (Pearson, K., 1857-1936) に受け継がれた。ピアスンは、1903 年にゴールトンらと雑誌 “*Biometrika*” を創刊し、1911 年のゴールトンの死とともに優生学講座の教授に転じた。今日、心理学でも用いられる積率相関係数 (Pearson の r)、カイ二乗検定などはピアスンが考えたものであるし、 t 検定は弟子のウィリアム・ゴセット——ピアスンの「忠実な弟子」という意味で「スチューデント」という筆名を用いた——により、また実験計画法と分散分析 (F 検定) はピアスンと反目しながらもその跡を襲ったロナルド・フィッシャー (Fisher, R. A.) により考案されたものである〔ピアスンとその学派の研究については、安藤 (1989) の伝記に詳しい〕。

さらに、心理学の開発した統計技法である因子分析の発展は、UCL の教授であったチャールズ・スピアマン (Spearman, C. E., 1863-1945) と、その後継者のシリル・バート (Burt, C., Sir, 1883-1971) によるところが大きい。

スピアマンは、1911 年に UCL の「精神と論理学」講座の教授に就任し、1928 年から 31 年まで同コレッジの心理学講座初代教授となった。スピアマンは知能検査の下位検査の因子分析の結果から、知能を一般知能因子 (g 因子) と特殊知能因子 (s 因子) に分類する「知能の二因子説」を提唱した。また、順位相関係数 (Spearman の r) やスピアマン＝ブラウンの公式などの統計学分野での業績でも良く知られている。

このスピアマンの跡を継いで、ユニヴァーシティ・コレッジの心理学教授を務めたのがバートである。バートはオックスフォード大学でマクドゥーガルに心理学を学んだ後、1924 年にロンドン大学教育研究所 (Institute of Education) の教授、1932 年から 1950 年まで UCL の教授を歴任した。バートは双生児法による知能の遺伝学的研究を行なったが、死後データ捏造などの問題が指摘され、毀誉褒貶の大きい研究者である。

以上にまとめたように、ロンドン大学ユニヴァーシティ・コレッジは、相関係数、カイ二乗検定、 t 検定、分散分析、因子分析と、現在でも心理学で用いられている基本的な統計的手法の殆どすべてを開発してきたのであり、その貢献は多大である。

なお、ロンドン大学の個人差測定研究の流れを組む研究者としては上記の他にも、精神医学研究所 (Institute of Psychiatry) とモーズレー病院の教授を務めたハンス・アイゼンク (Eysenck, H. J., 1916-) がいる。アイゼンクは、ドイツの出身であるが、ユダヤ系のためにナチスの迫害を逃れて 1936 年にイギリスに移住し、神経症的傾向と外向性—内向性を測定する質問紙法性格検査の MPI (Maudsley Personality Inventory) を開発するなど、パーソナリティ理論の発展に貢献した。また、彼の息子のマイクル・アイゼンクもロンドン大学に勤務する心理学者である。

●MRC 認知発達ユニットの発達研究

前出のバートは、UCL の心理学の研究分野に児童心理学、犯罪心理学、教育心理学を付け加えた。これがロンドン大学の発達研究の礎となったのであるが、しかし、その後も発達心理学はイギリスではずっとマイナーな研究分野であり続けた。その状況を変えたのが UCL の協力研究機関として設立された「MRC 発達心理学ユニット (Medical Research Council Developmental Psychology Unit)」である。MRC 発達心理学ユニットは、1968 年から 1981 年まで、ニール・オコナー (O'Connor, N.) が所長を担当した。そこでの主要な研究テーマは、障害児 (精神遅滞児、

聴覚障害児、自閉症児など）の発達心理であった（Bryant, 1983 b; Sloboda, 1983 参照）。

この研究所は、1982年にジョン・モートン（Morton, J.）が所長になり、名称もMRC認知発達ユニット（Medical Research Council Cognitive Development Unit）に衣更えした。MRC認知発達ユニット（図1b参照）の創設以来のメンバーは、所長のモートン、MRC発達心理学ユニットから移籍したウタ・フリス（Frith, U.）、そしてアネット・カーミロフ＝スミス（Karmiloff-Smith, A.）とアラン・レスリー（Leslie, A.）らである（Medical Research Council Cognitive Development Unit, “Progress Report 1986–1991”より）。なお、レスリーはアメリカのラトガーズ大学に移籍している。

MRC認知発達ユニットの最近の代表的な研究成果として、たとえばフリス（Frith, 1989）の“Autism”, モートンら（Johnson & Morton, 1991）の“Biology and cognitive development”, マイク・アンダースン（Anderson, M., 1992）の“Intelligence and development”, カーミロフ＝スミス（Karmiloff-Smith, 1992）の“Beyond modularity”, フランセスカ・ハッペ（Happé, F., 1994）の“Autism”などの著作が挙げられる。自閉症（autism）の研究は、名称をMRC認知発達ユニットに変更した現在でも、同研究所の研究プロジェクトの主要な柱の1つとなっている。

●ケンブリッジ大学の心理学

イギリスで二番目に創設（1209年）されたケンブリッジ大学（University of Cambridge）は、ロンドン大学とほぼ同じ頃、哲学から分離して実験心理学の研究をスタートさせ、イギリスの心理学の発展に大いに貢献してきた（図1c参照）。前出のウォードは、ケンブリッジ大学で哲学を修め、ドイツで学んだ後、1875年にケンブリッジ大学に戻った。ウォード自身は哲学者であり実験科学者ではなかったが、心理学実験室の設置を痛感し、大学当局にその設置を何度も要望した。それが1897年になってようやく実ったのである（今田, 1962）。

ロンドン大学ユニヴァーシティ・コレッジが心理測定の長い伝統を持つのに対し、ケンブリッジ大学の心理学は実験研究に異彩を放ち、実験心理学の伝統を形作っていく。その中でも、フレデリック・バートレット（Bartlett, F. C., Sir, 1886–1969）の研究は特筆される。

バートレットは、ケンブリッジ大学で心理学を学び、1915年にケンブリッジ大学の心理学の実験助手に就任以後、ケンブリッジ大学の心理学の中心的研究者となって活躍した。特に、その代表的著書“Remembering: A study in experimental and social psychology”（1932年）は、記憶研究の古典的文献として現在も時々引用されるものである。

このバートレット門下の優れた実験心理学者として、リチャード・グレゴリー（Gregory, R. L.）とドナルド・ブロードベント（Broadbent, D. E., 1926–1993）の2人の名をあげることができる。

グレゴリーは、ケンブリッジ大学、エディンバラ大学、ブリストル大学の教授を歴任した視覚心理学者で、立体視や錯視の研究を行なった他、『インテリジェント・アイ』（Gregory, 1970）などの視覚心理学の啓蒙書の著者としても知られている。アイデア豊かな実験心理学者だったグレゴリーの才能の片鱗は、イングランド西南部の都市ブリストルの駅前にある、彼が企画した科学博物館「エクスプロラトリウム」の展示の内容にも窺い知ることができる。

もう1人のブロードベントは、ケンブリッジ大学の応用心理学ユニットの所長をした後、晩年

にはオックスフォード大学に移籍し、オックスフォードの心理学研究の水準を高めることに貢献した。ブロードベントは、様々な場面での人間の注意 (attention) の問題が中心的研究テーマであり、遂行に及ぼすノイズの問題を研究したほか、「認知的失敗質問紙」の作成でもよく知られている。1975 年にアメリカ心理学会賞をも得たこの世界的な心理学者は、いろいろな意味でイギリスの心理学を代表する人であったと言えよう (Baddeley & Weiskrantz, 1993 参照)。

ブロードベントは、左右の耳に別々のことばや音を聞かせて聞き取りやすさを調べる両耳分離聴 (dichotic listening) の研究で著名であるが (Broadbent, 1958)、これは航空管制業務における混信状態での音の聞き取りやすさの問題から出発したもので、応用研究が基礎的理論を進展させた例としてよく知られている。

このように、ケンブリッジ大学の心理学の伝統のもう 1 つの特色は、応用心理学の研究にある。英国心理学会は毎年 12 月にロンドン会議を開催するが、その折に故ブロードベント教授の業績を讃えて設けられた「D. E. ブロードベント記念レクチャー」を行なっている。1994 年 12 月に開催され筆者も参加する機会を得た、1994 年度のロンドン会議の「D. E. ブロードベント記念レクチャー」の内容をかいつまんで以下に紹介することによって、ケンブリッジ大学の心理学の特色の 1 つである応用心理学的研究の一端を示すことにしたい。

この年の「D. E. ブロードベント記念レクチャー」は、ケンブリッジ大学教授のアラン・バデリー (Baddeley, A. D.) によって行なわれた。バデリーは、交通事故の後遺症のために杖をついて登場したが、のっけから「今日は、作業記憶または歩く負傷者 (working memory or the walking wounded) の話ではありません」と自分を笑いものにしているイギリス流ユーモアを効かせた。バデリーは、最初郵便番号の読み取りやすさの研究で学位を取り、現在は作業記憶の研究の世界的権威である。バデリーの講演内容は、ケンブリッジ大学の応用心理学ユニット (Applied Psychology Unit) の 50 年史であった。ここで行なわれてきた研究は、たとえば、電話番号システム、木のなめらかさの判断、顔の再認、潜水時の知能の低下、自動車電話時の判断能力の低下、パイロットを脅かさないような警告音、痴呆症の診断のためのドア・テスト等々である。自動車電話の問題などは、それが実用化されるはるか以前から研究されていたという。このような応用研究の強さは、イギリスの心理学全体に言えることであるが、ケンブリッジ大学の「お家芸」なのである。

さて、現在、ケンブリッジ大学の発達心理学関係の研究者としては、アナロジー推理の研究で英国心理学会のスピアマン・メダル (若手研究者対象の学会賞) を受賞し、*"Analogical reasoning in children"* 等の著作のあるウシャ・ゴスワミ (Goswami, U., 1992; 図 2 f)、自閉症児の視線の理解や「心の理論」(これについては 3 節で詳しく述べる) の発達を研究し *"Mindblindness"* を書いたバロン＝コーエン (Baron-Cohen, S., 1995; 図 2 d)、「心の理論」関係の研究論文をいくつか発表しているジム・ラッセル (Russell, J. C.) らがいる。

●オックスフォード大学の心理学

イギリス最古 (1096 年創設) のオックスフォード大学の心理学の歴史は、大学そのものの歴史に比して華々しくないだけでなくロンドン大学ユニヴァーシティ・コレッジやケンブリッジ大学の心理学と比べても特に目ざましいものであったとは言えない。1889 年には、精神哲学 (Mental

Philosophy)の講座がオックスフォード大学に設立された。しかし、科学的な心理学は、1935年に実験心理学研究所 (Institute of Experimental Psychology) ができるまで待たねばならなかったが、これとても小さな実験室と学位授与のためのコースがあるだけであった。心理学の学部教育は、第二次大戦後になってようやく開始された。1947年にジョージ・ハンフリー (Humphrey, G.) が「心理学・哲学・生理学」の初代教授となった。そして、1971年になって、ようやくその講座が実験心理学部 (Department of Experimental Psychology) に改組され、建物 (図1d参照) も現在の地に移転したのである (University of Oxford, "A guide to the Department of Experimental Psychology, 1992-1993" より)。

大学自体の歴史に比べて心理学研究の歴史の浅いオックスフォード大学では、名声の確立した教授が外部から招聘されることが少なくなかった。先に述べた故ドナルド・ブロードベントをケンブリッジ大学から招聘したのは、その一例である。

このような外部招聘教授の代表格は、アメリカの心理学者ジェローム・ブルーナー (Bruner, J., 1915-) であろう。ブルーナーは、ハーヴァード大学教授からオックスフォード大学教授に転じてオックスフォード大学の発達心理学研究の発展に貢献した (1972年から8年間在籍)。この期間のブルーナーの活動については、その自伝『心を探して In search of mind』に詳しく書かれている (Bruner, 1983)。

ユダヤ系アメリカ人のブルーナーは、デューク大学に進んで心理学を学ぶが、大学での週1回の礼拝を拒否して停学処分を受けた。窮地に立ったブルーナーを救ったのが、ウィリアム・マクドゥーガル教授 (「ロンドン大学ユニヴァーシティ・コレッジ」の項参照) であった。マクドゥーガルは、彼の実験室の助手として必要であるという名目でブルーナーを復学させてくれたのである。これがブルーナーにとってイギリスの心理学 (者) との最初の出会いであった。

その後、ブルーナーはハーヴァード大学の大学院に進学し、第二次大戦中は戦時情報部に勤務した後、戦後はニュー・ルック心理学をひっさげてアカデミズムの世界に華々しく登場し、スプートニク・ショック後のカリキュラム改革運動のリーダーとして活躍したり、方略 (strategy) 研究で認知科学の基礎を築くなど、ハーヴァード大学の教授として目ざましい活躍をした。そのブルーナーが、ワイスクランツ (Weiskrantz, L.) の招聘を受諾し、1972年にオックスフォード大学へ移籍したことは当時ちょっとした話題となった。ブルーナーは妻や友人たちと6月の大西洋をヨットで航海し、イギリスに渡った。

アメリカからヨットに乗ってイギリスに赴任するようなブルーナーの進取の気風は、保守的なオックスフォード大学の伝統とは相容れない部分があり、最後は「ブルーナー叩き」にあってイギリスを撤退することを余儀なくされたのであるが、ブルーナーのオックスフォード滞在は、ブルーナーの思想形成にとっても、オックスフォード大学の心理学の発展にとっても、大きな意義があったと評価されるべきことであろう。たとえば、オックスフォード大学の発達心理学の現在のスタッフのポール・ハリス (Harris, P. L.; 図2b) は、ある講演の中で、スケイフとブルーナー (Scaife & Bruner, 1975) による乳児の視覚的合意注意 (joint visual attention) の研究と、メルツォフとムーア (Meltzoff & Moore, 1977) による新生児の舌出し模倣の研究の2つをオックスフォード大学で最初に行なわれた世界的な発達心理学研究として誇らしく語ったが、この2つの研究は共にブルーナーの指導によるものである。視覚的合意注意の研究のマイクル・スケイフ

(Scaife, M.) は、最初、オックスフォードにいた著名なエソロジスト（比較行動学者）のニコ・ティンバーゲン（Tinbergen, N., 1907-1988）のもとでチョウの羽の「眼状斑点」が鳥の攻撃をいかに抑制するかという研究をしていたが、ブルーナーの指導によって乳児の「眼」の働きの研究に進んだのである。他方、アンドリュー・メルツォフ（Meltzoff, A.）は、ハーヴァード大学でブルーナーの学生だったが、ブルーナーと共にオックスフォード大学に移り、新生児の舌出し模倣の研究を行なったものである。

ブルーナーは、当時新設されたばかりのオックスフォード大学のワッツ講座心理学教授（Watts Professor of Psychology）に就任した。ブルーナーの後これを受け継いだのがピーター・ブライアント（Bryant, P. E. 図 2 a）である。ブライアントの研究テーマは、知覚発達、数能力の発達、難読症（dyslexia）などであるが、彼のもう 1 つの本領は弟子を育てるのが巧いことであり、ブライアント門下には、乳児の空間認知の発達を研究するランカスター大学のギャヴィン・ブレムナー（Bremner, G.）、サセックス大学のジョージ・バターワース（Butterworth, G. E.）、ケンブリッジ大学のウシャ・ゴスワミ及びサイモン・パロン＝コーエンら錚々たる研究者がいる。また、ブライアント夫人のテレジンハ・ヌネス（Nunes, T.）は、ブラジル出身でブラジルのストリート・チルドレンの算数能力の研究で知られ、現在はロンドン大学教育研究所勤務である。

オックスフォード大学には、現在ブライアント教授の他に次のようなスタッフが発達研究を行っている。それは、盲児の空間認知の研究を“*Understanding and representing space*”に集大成したスザンナ・ミラー（Millar, S., 1994）、子どもの感情理解の発達の問題を研究し、“*Children and emotion*”などの著作があるポール・ハリス（Harris, 1989）、コネクション主義の理論を言語発達研究に応用するキム・プランケット（Plunkett, K.）、「不平等」「階級」「社会体制」などの概念の発達を調べる社会心理学者のニコラス・エムラー（Emler, N.）らである。

●エディンバラ大学の心理学

スコットランド地方の首都エディンバラにあるエディンバラ大学（University of Edinburgh）は、1583 年の創設である。これは、セント・アンドリュース大学（1411 年創設）、グラスゴウ大学（1451 年創設）、アバディーン大学（1495 年創設）に次いで、スコットランドで 4 番目に古い大学であるが、学生数は 1 万 5,000 人を越え、質・量ともにスコットランド屈指の大学である。

エディンバラ大学が生んだ発達心理学者にマーガレット・ドナルドソン（Donaldson, M.）がいる。ドナルドソンは、エディンバラ大学でフランス語を学んだ後に心理学に転じ、「思考の誤りの研究に対する知能検査の理論の関連性」というテーマで博士号を取得した。ドナルドソンは一時期エディンバラ大学の発達研究をリードしたが、彼女の研究テーマは子どもの思考・言語の発達と教育であった。ドナルドソンの研究業績は、その肖像画とともに“*Understanding children: Essays in honour of Margaret Donaldson*”に示されている（Grieve & Hughes, 1990）。

また、乳児の知覚・認知発達に関して精力的に研究を行なったトム・パウアー（Bower, T. G. R., 1941-）は、かつてエディンバラ大学を代表する発達心理学者として一世を風靡した。ブルーナーの自伝『心を探して』には、パウアーのことが次のように書かれている。

「実に聡明だがかなり風変わりな若いスコットランド人で、コーネルで博士号をとってきたば

かりのトム・パウアーが、ちょうどハーヴァードにやってきたところだった。……（中略）……トムは人間の乳児に関心があるばかりではなくて、心がいかににはじまるかに特に興味をもっていった。われわれはずいぶん話をし、メモをやりとりした。私は多くを彼から学んだ。彼の研究結果を、そのいくつかが再現不可能だったということで、疑う心理学者がある。彼は自分の発見を解釈するのに、やや夢中であったかもしれないと思う。しかし、知的能力をもった人間として、彼は自分の問いと、そしてその問いに答える手段の工夫という両方の点で守備範囲が広く、思慮深く、利口である。」（田中一彦訳、239-240 ページ）

パウアーの近著 *“The rational infant”* (Bower, 1989) は、記述がいささか雑な部分も散見されるが、彼のアイデアの豊かさを窺い知ることができる。なお、パウアーはアメリカのテキサス大学ダラス校に移籍したが、エディンバラ大学時代のパウアーのことについては、野村（1984）の『スコットランドの小さな学校』が参考になる。

現在、エディンバラ大学には乳児発達を研究し、間主観性（intersubjectivity）の概念で知られるトレヴァーセン（Trevvarthen, C.）がいる。トレヴァーセンは、ニュージーランド出身で最初は視知覚の研究をしていた（Bruner, 1983 参照）。

●サセックス大学の心理学

イングランド南部の保養地ブライトン郊外にあるサセックス大学（University of Sussex）は、1961 年創設の新しい大学であるが、短期間に高い評価を勝ち取っている。

ここには、心理学と人工知能の研究で知られるマーガレット・ボーデン（Boden, M., 1936 -）がいる。ボーデンは、ケンブリッジ大学卒業後、ハーヴァード大学でブルーナーの指導を受けた。ボーデンの代表的著作には *“Piaget”* (Boden, 1979) や *“Artificial intelligence in psychology”* (Boden, 1989) などがある。

サセックス大学のジョゼフ・パーナー（Perner, J.; 図 2 c）とジョージ・バターワースは、共に現在イギリスを代表する中堅の発達心理学者である。「心の理論」の研究で知られるパーナーは、オーストリア出身でザルツブルク大学、トロント大学で教育を受けた。その代表的著作として、*“Understanding the representational mind”* (Perner, 1991) がある。パーナー門下には、ケント大学のスー・リーカム（Leekam, S.; 図 2 e）やジュリー・ハドウィン（Hadwin, J.）らがいる。他方、バターワースは、オックスフォード大学で学位を取り、合同注意など乳児の発達研究で知られている。

その他、ブルーナーと共に合同注意の研究を始めたマイケル・スケイフ、認知科学の観点から乳児研究を展開し、*“The computational infant”* を書いたジュリー・ラトコウスカ（Rutkowska, J. C., 1993）もサセックス大学の研究スタッフである。

●タヴィストック・クリニックでの発達研究

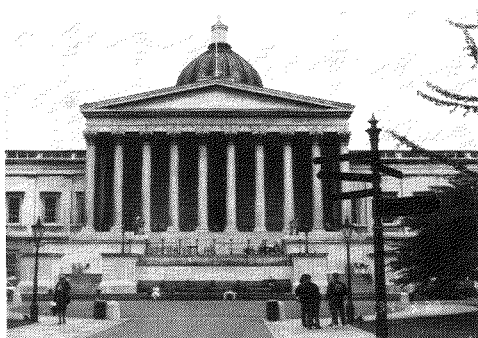
イギリスの発達心理学を語る時、ジョン・ボウルビー（Bowlby, J., 1907-1990）のことを忘れるわけにはいかない。ボウルビーは、ケンブリッジ大学で自然科学と心理学を学び、ロンドン大学で児童精神医学を修めた。第二次大戦中は軍の精神科医を努めた後、1945 年から 1972 年までロンドンのタヴィストック・クリニックに勤務した。ボウルビーは、ローレンツ（Lorenz, K.）の

比較行動学，ハーロウ（Harlow, H. F.）の実験心理学の影響を受けながら，愛着（attachment）の理論を築き上げた。アメリカ人のメアリー・エインズワース（Ainsworth, M. D. S.）は，1950年から数年間タヴィストック・クリニックでボウルビーと研究チームを組み，母子分離の研究を行なった。この2人は，愛着理論の確立に貢献した功績により1989年のアメリカ心理学会賞を同時に受賞している。

このボウルビーの母性剥奪（maternal deprivation）の概念を批判的に検討したり，自閉症を言語・認知障害と位置づけたマイクル・ラター（Rutter, M., 1933-）は，バーミンガム大学で医学を修め，ロンドン大学精神医学研究所教授として活躍している。

また，グラスゴウ大学医学部出身で『引き裂かれた自己』などの著作で知られる精神科医のレイン（Laing, R. D., 1927-）は，一時期タヴィストック・クリニックに勤務していた。

現在，このタヴィストック・クリニックには，自閉症児の研究で知られるピーター・ホブスン（Hobson, R. P.）がいる。最近ホブソンは“*Autism and the development of mind*”を書き，自閉症の研究によって子どもの自他の意識と心の発達を照射しようとしている（Hobson, 1993）。



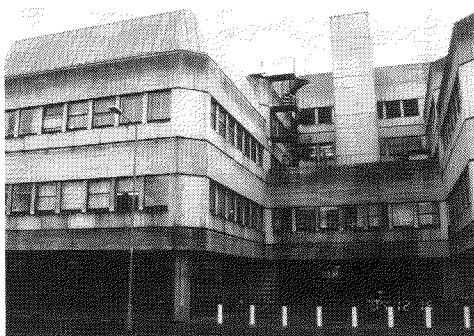
a：ロンドン大学ユニヴァーシティ・コレッジ（UCL）の本部構内。正面は，大学図書館の建物である。



b：ロンドンのユーストン駅近くにあるMRC認知発達ユニットの玄関。集合住宅の一部を専有する形式。



c：ケンブリッジ大学実験心理学部の玄関。ダウニング・サイトの理科系キャンパスの中に位置している。



d：オックスフォード大学実験心理学部の玄関。動物学部と建物を共同利用している。

図1 イギリスの4つの研究機関の建物（筆者撮影）

2. イギリスの大学における心理学の教育

●イギリスの心理学は理科系

イギリスでは、心理学は理科系の分野に数えられることが多い。たとえば、オックスフォード大学およびケンブリッジ大学の心理学部門は名称からして実験心理学部 (Department of Experimental Psychology) となっている。オックスフォード大学実験心理学部の建物は、オックスフォードの理系地区 (Science Area) に位置し、動物学部 (Department of Zoology) と共有のものであり、ごく一部だけではあるが、授業担当を相互乗り入れしている〔現在、この動物学部には「利己的遺伝子説」で著名な生物学者リチャード・ドーキンズ (Dawkins, R.) がいる〕。

大学入学のために高等学校で学ぶ科目も、心理学に進む生徒の場合にはかなり理科系にシフトしている。たとえば、筆者が知りあったケンブリッジ大学のある大学院生 (実験心理学専攻) は、A レベル試験で「数学」「物理学」「化学」という組み合わせで受験したと言っていた。

学段落階での心理学のコースは3年制であるが、オックスフォード大学の場合、1年次の途中から純粋に心理学だけを学ぶコース (EP; Experimental Psychology) と、心理学・哲学・生理学の中から2つを学ぶコース (PPP; Psychology, Philosophy and Physiology) の二手に別れる。実験心理学 (EP) のコース要件は、生物学、物理学、数学、計算機科学などの実験的分野のどれかを含む1つの「理科」科目のAレベル取得が望ましいとされているし、心理学・哲学・生理学 (PPP) では、生物学のAレベルが関連科目とされる。

また、ロンドン大学ユニヴァーシティ・コレッジの「心理学及び認知科学」専攻の受験資格について見ると、「数学と理科1科目のAレベルが望ましい」と記されている。

Aレベル試験には、実は「心理学」という科目もあって、その受験参考書 (Flanagan, 1994) を見ると、高校生でもかなり高度の内容の心理学を教えていることがわかる (表1参照)。これは、日本の大学の一般教育の心理学と同等以上の内容と言ってもよいだろう。しかし、このAレベルの「心理学」は、オックスフォード大学やケンブリッジ大学などの受験には必要とされず、選抜に当たってはむしろ理数的能力を重視するようである。

以上に述べてきたことから明らかなように、イギリスの心理学は、教育・研究の両面において理科系的な研究分野とすることができるだろう。

表1 Aレベルの「心理学」の学習事項一覧 (Flanagan, 1994)

- | |
|---|
| 1. 認知心理学: 知覚, 情報処理, 思考, 注意, 記憶, 学習 |
| 2. 社会心理学: 社会知覚, 帰属理論, 態度と態度変容, 対人魅力, 偏見, 向社会的行動, 反社会的行動, 同調・服従, グループ・ダイナミックス, メディアの影響 |
| 3. 発達心理学: 初期発達, 認知発達理論, 道徳性・社会性の発達, 社会化, 青年期・成人期・老化 |
| 4. コミュニケーション: 言語, 非言語コミュニケーション, 動物のコミュニケーション |
| 5. 知能・パーソナリティと測定: 知能の概念, パーソナリティの概念, 心理測定の技法, 知能検査, パーソナリティ検査 |
| 6. 異常心理学: 異常の概念, 異常のモデルと治療, 診断と分類, 記述と病因論, 非定型的発達, 社会的・倫理的諸問題 |
| 7. 生物学的心理学: 神経系と行動, 意識の状態, 生物学的リズム, 動機づけ, 情動, 不安とストレス, 痛み |
| 8. 動物の行動: 動物行動学の説明, 刷りこみと学習, 社会的行動, 研究における動物の利用 |
| 9. 応用心理学: 組織心理学, 環境心理学, 教育心理学, 健康心理学 |
| 10. 研究計画: 研究法, 実験計画, 統計的分析, 倫理的配慮 |

●心理学の授業形態

イギリスでは、アメリカの大学と歩調を合わせるため二学期 (semester) 制への移行を検討している大学も少なくないようだが、現時点では三学期 (term) 制をとる大学が主流である。学部の授業は、各8週間からなる3つのタームごとに行なわれるが、それには講義 (lecture)、セミナー (seminar)、実習 (practical) の3種類の形態がある。以下、主としてオックスフォード大学のカリキュラムを例にとりながら、心理学の授業形態についてその概略をスケッチしよう。

「講義」は、多人数の学生を対象に大きな階段教室 (lecture theatre) で行なわれる。その形式は日本の大学の講義と大差がないと言ってよい。しかし、授業時間割は1時間刻みであるが、授業時間割には移動のための休憩時間がまったく含まれていないので、正味の授業時間は50分ほどである。50分授業を年間24回 (8週間×3ターム) しか行なわないのだから、トータルの授業時間数は日本の大学の一般的な通年授業よりも少ない。しかし、それを補うために、文献欄を充実したハンドアウト (要約資料) を配付するといった工夫が行なわれている。

「セミナー」は、わが国の大学で通常行なわれている「演習」とはまったく性格を異にするものである。これは、大学の内外の研究者 (外国の研究者も含む) を講師 (ゲスト・スピーカー) に招いて、その人の専門分野のテーマで講演をしてもらうものである。セミナーは、主として小さな規模の演習室を利用して行なわれ、発表者はOHPやスライドを使いながら、約50分ほどで研究の報告をし、その後10分あるいは時にはそれ以上をかけて質疑応答を受ける。一般に、イギリスのセミナーでは配付資料はめったに配られない。

このように、学生にとってセミナーは、専門分野の最先端の研究内容を知ることができるという点では大変よいのであるが、テーマが週替わりで全体として体系性がないという欠点をはらんだ授業形態であると言えよう。

最後に「実習」であるが、心理学の分野では実習や実験が重要であることは言うまでもない。たとえば、オックスフォード大学実験心理学部の実習の中核となる「コア実習」を例にとると、それは火・水・木の週3回、毎回午後2時～5時に実施される形式であり、時間はたっぷり取ってある。ただし、筆者は実習の具体的授業内容や授業形式について実際に体験する機会がなかったので、これ以上のことを述べることはできない。

以上から分かるように、オックスフォード大学やケンブリッジ大学では、学部の授業の位置づけは必ずしも高いとは言えない。講義は授業時間が短く、セミナーは授業というよりは講演であり体系性を欠いている。しかし、これを補って余りあるのが、各コレッジ (college) で行なわれているチューター制度 (tutorial) である。

チューター制度は、「1人または2人の学生が、自分の指定した科目のチューターと毎週行なう授業である。主任チューターは、学生と同じコレッジに所属する。チューターは、専門科目に関して他のチューター (学生と同じコレッジとは限らない) と授業について調整を行なう。…… (中略) ……学生は、チュートリアルでは、チューターが1週間前に示した様々な資料を読み、1週間勉強した結果を提示する。それは、小論文またはある問題の解答の形式をとる。チュートリアルは、学生自身の考え方を前進させ、ディスカッションを通してそれを発展させるよい機会である。」 (University of Oxford, "Undergraduate prospectus, 1995-1996", 8ページ) と説明されている。

なお、オックスフォード大学では学部学生の個別指導に対しては「チュートリアル」、大学院生の論文指導には「スーパーヴァイズ」の用語を当てて区別している。

イギリスの大学教員の職階は、大別してプロフェッサー (Professor)、リーダー (Reader)、レクチャラー (Lecturer) の3種類に分かれる。レクチャラーの一部は、シニア・レクチャラー (上級講師) と呼ばれて区別されている。また、レクチャラーの下にはリサーチ・アシスタント (Research Assistant) がいる。オックスフォード大学の場合、プロフェッサーは通常専属の秘書がつく一種の管理職で、大学院生のスーパーヴァイズは担当するが、学部生に対するチュートリアルの義務を免除されている。したがって、リーダーからリサーチ・アシスタントまでがチュートリアルを担当する。

ブルーナーは、自伝『心を探して』の中で、オックスフォード大学での教授経験について「教授として、私は講義をすることができた (し、また事実したので) が、しかしオックスフォードの意味では、私は「教え」なかった。つまり、教授は個人指導はせず、それは若手の生計の道を奪うことになる」(田中訳, 429～430 ページ) と述べている。若手の講師は、個別指導による収入が重要というわけであるが、個別指導に割かねばならない時間がオックスフォード・ケンブリッジの若手研究者の研究時間を圧迫する面があることもまた事実である。

近年、学問研究の現代化と大学の大衆化にともない、個別指導中心のオックスフォード・ケンブリッジ型の「手作りの教育」が時代の趨勢に合わなくなりつつあるという認識が生まれてきている。このことは、オックスフォードやケンブリッジの内部でも、特に理科系の学問分野で、ずっと論議されてきた。コレッジのチュートリアルと学部の授業 (講義・セミナー・実習) という2本立の教授システムは、いわば両者の妥協の産物であると言える。

●心理学卒業生の進路

The Association of Graduate Careers Advisory Services (1993) は、大学での専攻分野別の進路状況の報告書を刊行している。その報告書によると、心理学専攻の卒業生の総数は1992年度で2,441人である。また、心理学専攻の卒業生数の性別内訳は、男性667人、女性1,774人であり、圧倒的に女性優位となっている。なお、この年の大学卒業生総数(113,888人)のうち男性の比率は、約54%である。

次に、心理学コースの卒業生の卒業直後の進路を分類すると次のようになった。

A	英国での終身雇用の就職……………	36.2%
B	英国での一時雇用の就職……………	7.3
C	大学院等への進学……………	15.6
D	教職の訓練……………	8.9
E	その他の訓練……………	6.5
F	外国での雇用……………	2.5
G	外国への留学……………	2.8
H	就職せず……………	13.1
I	不明……………	7.2

このうち、「C 大学院進学率」15.6%という数字は、物理学 (40.0%)、化学 (41.6%)、生物学

(32.5%) のような理学系の各分野ほどではないが、全体平均 (12.8%) より高い方であると言える。日本とは異なり、理科系でも工学的分野の大学院進学率は比較的低く、電子工学 (15.4%)、機械工学 (11.8%)、計算機科学 (10.4%)、土木工学 (10.3%) は心理学より低い。心理学の大学院進学率が高いのは、心理学を職業とするためには学部教育だけでは不十分という認識が行き渡っているからのようである。

3. 発達心理学研究の現状

●イギリスの発達研究の全般的傾向

〈哲学的考察による発達理論の深化〉

イギリスの哲学の伝統は、19 世紀の後半に心理学が科学として離陸するに際して、大きな足枷となった。心 (mind) の研究は、言うまでもなく哲学の長い伝統の中にあった。オックスフォード大学とケンブリッジ大学の心理学が哲学から独立する時、ことさら「実験心理学部」と名乗ったのは、哲学からの袂別を強調し、自らのアイデンティティを確立するためであったのだろう。

しかしながら、現在では哲学と心理学は、新たな共存関係を築き上げようとしている。1956 年以降に発展したとされる認知科学 (cognitive sciences) をハワード・ガードナーは「心の新しい科学 The mind's new science」と呼んだが、この認知科学を構成する既存の学問として哲学、心理学、人工知能論、言語学、人類学、神経科学の 6 領域があるとされる (Gardner, 1985)。

ここにおいて、イギリスの哲学の伝統は、心理学の理論の深化を助ける重要な要素であることが明らかになりつつある。後に詳しく見る「心の理論」研究も、哲学的考察によって発達理論の深化が期待される分野である。

〈実験心理学的な発達研究の展開〉

既に述べたように、イギリスの発達研究は個人差測定分野から始まった。ゴールトンに端を発する生物測定学 (biometrics) の方法を人間にもあてはめようとする試みは、特に知能の研究の中で結実した。しかしながら、個人差測定の研究は、発達の過程や機構を明らかにするものではなく、一定の限界を有しており、1950 年代までのイギリスの発達研究の限界もそこにあった。

この傾向が大きく変化したのは、1 つには、1968 年に MRC 発達心理学ユニットでの研究が開始されたことによる。この研究所の歴史を振り返って、ブライアントは「第二次大戦後イギリスでは個人差研究以外には児童心理学はほとんどなかった。個人差の研究を支配した相関分析や因子分析は、技術的には見事なものだったが、理論的真空を残した」と述べ、ニール・オコナーらのはじめた障害児の発達心理の実験的研究の意義を強調している (Bryant, 1983 b)。

また、トム・パウアーをはじめとする、乳児を対象とした一連の実験的研究は、ジャン・ピアジェ (Piaget, J.) の発達理論が扱いえなかった問題を次々に明らかにしていった。

このようにして、かつては個人差の測定と相関分析がイギリスの発達研究の中心であったが、現在では実験的研究がイギリスの発達研究の新たな伝統となっているのである。

〈応用研究の重視〉

イギリスの心理学のもう 1 つの伝統は、前出のケンブリッジ大学応用心理学ユニットやその所長であったブロードベントの両耳分離聴の研究の項で述べたように、応用研究の重視という点に

ある。そして、このことは、発達心理学の分野にもあてはまるのである。

MRC 認知発達ユニットとその前身の MRC 発達心理学ユニットの研究は、障害児の発達研究を前面に押し立ててきた。1980 年代から発展してきた「心の理論」研究は、自閉症児の研究によって前進した部分が少なくない。発達の応用研究を進めることによって、発達の基礎研究も進展するというのを、身をもって実践してきたのがイギリスの発達心理学なのである。

●イギリスの発達研究に及ぼすピアジェ理論の影響

ジャン・ピアジェの認知発達理論が第 2 次大戦後のイギリスの発達心理学に与えた影響は小さい。たとえば、マーガレット・ドナルドソンやピーター・ブライアントの一時期の研究は、紛れもなくピアジェ理論の影響のもとに行なわれている。トム・パウアーの一連の実験心理学的な乳児研究も、ピアジェの考え方とそれに対する批判的な視点の上に成立したのである。

フランス語で著書・論文を書いたスイス人のピアジェの研究が、全世界的な規模で認められるようになったのは、イギリスの出版社 Routledge & Kegan Paul からピアジェの著作の英語訳が出版されたことが与かって大きい。しかし、現在のイギリスの発達心理学の研究に対して、ピアジェの影響はむしろ小さいと考えられる。このことを如実にあらわすのは、Routledge 社のものに限らず、ピアジェの英語の翻訳本がイギリスの書店の店頭には殆ど見られないことである。

一般に、ある学説が世界で認められるようになるためには、アングロ・サクソン圏での認知ということが大きな意味を持つ。学説が承認され、学問の世界で市民権を得るためには、英語で著作を書くことや、イギリスに定住・帰化することが有利となる。たとえば、ドイツ人のカール・マルクス (Marx, K. H., 1818–83) が、1849 年にロンドンに移住し、後半生を大英博物館の図書館での著述活動にあてたことは良く知られている。ジグムント・フロイト (Freud, S., 1856–1939) は、1938 年にロンドンに亡命した (フロイトが認められたのは最初アメリカにおいてであり、イギリスに亡命した翌年にフロイトは亡くなったのであるが、娘アナがその衣鉢を継いだ)。小説家のジョゼフ・コンラッド (Conrad, J., 1857–1924) は、帝政ロシア下のポーランドに生まれ、長い船員生活を経てイギリス国籍を取得し、英語で『ロード・ジム』などの小説を書いた。同じくポーランド生まれの文化人類学者のマリノフスキー (Malinowski, B. K., 1884–1942) は、1910 年にイギリスに渡り、1927 年にロンドン大学の人類学講座の教授になった。知識社会学や教育社会学で知られるカール・マンハイム (Mannheim, K., 1893–1947) は、ユダヤ系ハンガリー人を父としてブダペストに生まれ、教育はドイツで受けたが、1933 年にイギリスに亡命しロンドン大学で社会学を講じた。哲学の分野では、オーストリア生まれのルードヴィヒ・ウィットゲンシュタイン (Wittgenstein, L. J. J., 1889–1951) が 1908 年からマンチェスター大学、1912 年からケンブリッジ大学で学び、1939 年にケンブリッジ大学教授になった例、ハンガリー出身の物理化学者で哲学者のマイケル・ポラニー (Polanyi, M., 1891–1976) が 1933 年にイギリスに渡りマンチェスター大学教授に就任した例、オーストリア出身の科学哲学者カール・ポパー (Popper, K. R., Sir, 1902–1994) がニュージーランドを経由して、1946 年からロンドン大学 LSE 教授となった例などがある。前出の動物行動学者のニコ・ティンバーゲンは、オランダの生まれであるが、1949 年からオックスフォード大学の動物学部勤め、1966 年には教授となった (ケンブリッジ大学の動物行動学者のロバート・ハインド (Hinde, R.) は、このティンバーゲンの弟子である)。心

理学では、前出のロンドン大学精神医学研究所教授ハンス・アイゼンクの名をあげることができる。

このようにヨーロッパ大陸出身でイギリスで活躍した思想家や科学者の存在は、「島国」イギリスの懐の広さを示すものであるが、他方、ピアジェのように、イギリスとの接点が少ない研究者は英語圏での認知度が低くなるという問題も孕んでいるのではないだろうか。ピアジェについて言えば、現在はその学説に対する批判的見解の方が強いように思われる。ピアジェの研究が批判されるのは、感情や社会性の発達を軽視しているなどの理論上の問題に加えて、子どもとの対話を重視する「臨床法」的アプローチの方法論的限界など、批判を受けるだけの根拠は確かにあるだろう。しかし、問題は、英語で読めるピアジェの著作が以前よりも少なくなり、実際にはあまり読まれていないのに批判される存在になっているという点にある、と筆者は考える。共産主義国家が破綻してもマルクスの著作が無くならず、精神分析批判が強まっているにもかかわらずフロイトの著作集が消えてしまわないのに、ピアジェの著書は英語圏で消滅同然となっている。これはピアジェがイギリスに亡命しなかったからだと言ったら、「春秋の筆法」と一笑に付されるであろうか。ただし、1つの朗報は、ごく最近“*Seven pioneers of psychology*”という本がイギリスで刊行され、心理学の7人のパイオニアの中にピアジェが含まれ（他の6人は、ゴールトン、フロイト、W. ジェイムズ、K. ローレンツ、ティンバーゲン、B. F. スキナー）、ピーター・ブライアントによってピアジェの業績評価が行なわれたことである（Bryant, 1995）。

●「自己中心性」の研究

さて、筆者がそもそもイギリスの発達心理学の研究に注目する契機となったのは、ある1冊の本との出会いからである。それは、ヨーク大学の発達心理学者モーリン・コックス（Cox, M. V.）が編集した“*Are young children egocentric ?*”（Cox, 1980）である。この本は、ピアジェの自己中心性の概念（Piaget & Inhelder, 1948）を再検討するために、1978年にヨークで英国心理学会の発達部門年次大会の一環として開催されたシンポジウムの成果がまとめられたものである。

ピアジェらは、「3つの山問題」——ボール紙製の立体模型で3つの山が作られ、様々な位置に置いた人形から山がどのように見えるかを推測させる課題——の結果から、4～7歳の子どもたちが現在自分が見ている風景を人形の位置から見える風景として選択するという意味で自己中心的（egocentric）であると規定した。これについては、多くの追試実験が行なわれ、ピアジェらの結果に対する反証もたくさん提出されてきた（子安, 1990, 1991 参照）。“*Are young children egocentric ?*”は、この問題に対するイギリスの発達研究者からの解答の集大成であると言える。この本の各章のタイトルと執筆者は、次の通りであった。

第1章 自己中心性の概念が息吹を与える多様な研究の紹介

ノーマン・フリーマン（ブリストル大学）

第2章 ピアジェによる子どもの自己中心性概念が提起する問題についての一考察

ジョージ・バターワース（サウサンプトン大学；現在はサセックス大学）

第3章 乳児の空間の理解

ギャヴィン・ブレムナー（ランカスター大学）

第4章 子どもの視覚的視点取得

モーリン・コックス（ヨーク大学）

第5章 子どもの描画の背後にある秩序

ノーマン・フリーマン（ブリストル大学）

第6章 言語的な参照的コミュニケーションにおける自己中心性

ピーター・ロビンソン（ブリストル大学）

エリザベス・ロビンソン（ブリストル大学；現在はバーミンガム大学）

第7章 役割取得の社会的付随物

ポール・ライト（サウサンプトン大学）

各章の詳しい内容の説明をする紙幅がないが、本書を初めて手にした時、学会のシンポジウムでこの本のような水準の高いまとまった議論ができることに筆者は強い印象を受けた。

しかし、現在のイギリスの発達心理学研究の中心はピアジェの理論から離れ、「心の理論」研究に移行している。前記の7人の執筆者のうち、描画発達を研究していたフリーマン (Freeman, N. H.) とコミュニケーションの発達を研究していたエリザベス・ロビンソン (Robinson, E. J.) の2人は現在では「心の理論」研究に移行しているし、乳児の発達研究を続けるバターワースも比較的それに近い位置にいる。他方、特に「心の理論」研究を行っていないのは、“*Infancy*” (Bremner, 1988) を書き、乳幼児期の空間認知の実験室的研究を続けるブレムナー、“*The child's points of view*” (Cox, 1991) や “*Children's drawings of human figure*” (Cox, 1993) など著し、視点の理解や描画発達の研究を継続しているコックス、研究の重点を社会心理学に移したピーター・ロビンソン (Robinson, W. P.), 同じく社会的問題解決を主要な研究テーマとするライト (Light, P.) である。

イギリスの発達研究が「心の理論」一辺倒という訳では勿論ないが、それが最もホットなトピックであり、集中的に研究が行なわれていることは事実である。そこで、イギリスでの「心の理論」研究の成果を以下に簡単にまとめることにする。その際、霊長類研究、幼児の発達研究、児童の発達研究、自閉症児の研究に分けて順次見ていくことにする。

●イギリスにおける「心の理論」研究の展開

〈霊長類研究から始まった「心の理論」〉

「心の理論 theory of mind」の研究は、最初アメリカの霊長類学者のデイヴィッド・プレマック (Premack, D.) らの提唱ではじまった。プレマックら (Premack & Woodruff, 1978) は、チンパンジーなどの高等霊長類にも、あざむき (deception) など他の個体の「心」が理解できるかのような行動が見られることを観察し、これらの一連の行動の背後にあるものを「心の理論」と呼んで研究することを提唱した。プレマックらによれば「個体が自己または他者に対して心的状態を帰属させることができれば、心の理論を持っている」のであり、他者の目的 (purpose), 意図 (intention), 知識 (knowledge), 信念 (belief), 思考 (thinking), 疑念 (doubt), 推測 (guessing), ふり (pretending), 好み (liking) 等が推測可能なら、その人またはその動物は「心の理論」を持っていると規定されている。

イギリスでは、セント・アンドリュース大学のリチャード・バーン (Byrne, R.) とアンドリュー・ホワイトン (Whiten, A.) が霊長類の「心の理論」研究の代表的研究者である。この2

人が共同で編集した“*Machiavellian intelligence*” (Byrne & Whiten, 1988) は、たとえばサルが群れの中で多数派を形成して権力を握ったり、餌を他の個体に取りられないようにあざむき行動を示すなど、社会的文脈での知能のはたらきを「マキャヴェリの知能」と呼び、これに関する新旧の研究論文を集大成したものである。

その後ホワイトンは、“*Natural theories of mind*”を編集している (Whiten, 1991)。これは、1988年にセント・アンドリュース大学で開催された「心を読む行為の出現——二次的表象の進化、発達、シミュレーション」というシンポジウムの成果をまとめたものであるが、霊長類の研究だけではなく、幼児と自閉症児の「心の理論」を取り上げた包括的なシンポジウムとなっている。他方、バーンは、最近“*Thinking ape*”という単著を書いている (Byrne, 1995)。

〈幼児の「誤った信念」の理解〉

さて、前述のプレマックらの提唱を受けて、幼児期の「心の理論」の発達について新しい研究パラダイムを提唱したのがサセックス大学のジョゼフ・パーナーである。パーナーは、オーストリア出身であり、「ヨーロッパ大陸出身でイギリスで活躍する研究者」の1人である。それはともかく、パーナーら (Wimmer & Perner, 1983) は「誤った信念」課題によって、3歳までの子どもが「心の理論」を持たないことを実証的に示した。パーナーらの「誤った信念」課題では、最初におよそ次のようなお話を人形劇の形式で子どもたちに聞かせる (Perner, 1991)。

「マクシは、お母さんの買い物袋をあける手伝いをしています。マクシは、後で戻ってきて食べられるように、どこにチョコレートを用意したかをちゃんとおぼえています。その後、マクシは遊びに出かけました。マクシのいない間に、お母さんはチョコレートが少し必要になりました。お母さんは〈緑〉の戸棚からチョコレートを取り出し、ケーキを作るために少し使いました。それから、お母さんはそれを〈緑〉に戻さず、〈青〉の戸棚にしまいました。お母さんは卵を買うために出ていき、マクシはお腹をすかせて遊び場から戻ってきました。」

このようなお話の後、「マクシはチョコレートはどこを探すでしょうか」と尋ねる。この質問に対して3～4歳児はほとんどが正しく答えられず〈青〉の戸棚を選んでしまう。これに対し、4～7歳児は正しく〈緑〉の戸棚の方を選べるようになる。この結果から、パーナーらは「心の理論」の出現の時期が4歳頃からであるという結論を下している。

「誤った信念」課題に関するその後のいくつかの追試研究では、オーストリア、アメリカ、イギリスのいずれの国においても、3～4歳児のこの課題に対する通過率は低く (0～45%)、4～5歳児になると急に通過率が上昇する (41～87%) というかなり一貫したデータが得られている (Perner, Leekam, & Wimmer, 1987)。

また、「誤った信念」課題には、「スマーティ課題」と呼ばれる別のタイプのものがある。この課題では、最初ネスル社製のチョコレート菓子のスマーティ (smarties) の箱を子どもに見せて「箱の中に何が入っていると思いますか」と尋ねる。子どもたちの大部分は「スマーティ」と答えるが、実際には鉛筆が入っている。その後しばらくして、「ここに何が入っていたか?」及び「〇〇ちゃん (次に実験を受ける友達の名前) はこの中に何が入っていると思うのでしょうか?」という質問をする。この実験から、3歳児は自分の過去の信念を思い出せても他者の信念を考えることができないことが示された。上に引用したパーナーら (Perner, Leekam, & Wimmer, 1987) のデータには、このスマーティ課題の結果も含まれている。

最近、パーナーら (Clements & Perner, 1994) は、「誤った信念」課題のヴァリエーション実験を行ない、3歳児の発達の特徴を明らかにしようとしている。このヴァリエーション実験では、雄ネズミのサムが食べかけのチーズを巣穴の横の容器に入れて穴の中の巣に入っていくが、その間にケイティという雌ネズミがやってきてサムのチーズをかじり、少し離れた別の穴のそばの容器にチーズを移すという設定である。オリジナルの課題と異なる点は、「サムはどちらの穴から出てくるかな?」と実験者がつぶやいた時に、被験児の眼球の動きが観察できるような装置になっている点である。この実験の結果、3歳児は言語的に実施される「誤った信念」課題では正解できないが、眼球運動の観察からは正確な動きを示すことが分かり、3歳児の心の理解について新たな知見が提出されたのである。

〈児童の「二次的信念」の理解〉

およそ4歳頃から「心の理論」が発生するとして、他者の心についての理解は児童期にどのように発達していくのであろうか。パーナーら (Perner & Wimmer, 1985) は、次のような物語を用いた実験により、児童期になると「二次的信念」の理解が可能になることを示した。

- (a) ジョンとメアリーは公園にいた。メアリーはアイスクリームを買いたかったが、お金を持っていない。アイスクリーム屋さんは「午後もずっと公園にいるから大丈夫だよ」と言ってくれた。
- (b) メアリーは家に帰った。ジョンはアイスクリーム屋さんがパンを移動させようとしているのに気づきびっくりした。行き先を聞くと、もっと売れそうな教会の前に行くところだという。
- (c) たまたまメアリーの家の前を通りかかったアイスクリーム屋さんに、メアリーが行き先を聞くと、教会へパンを移動させるところだという返事を得た。ジョンは、このことを知らない。
- (d) 午後、ジョンは宿題をしていたが、メアリーに聞きたいことがあって、彼女の家に行った。するとお母さんが出てきて、メアリーはアイスクリームを買いに出かけたところだという。

このお話を聞き「メアリーはアイスクリーム屋さんのパンが公園にあると信じている、とジョンは誤って信じている」ことが分かれば、「二次的信念」が理解できたことになる。7～10歳児156人を対象にした実験の結果、この課題ができるのは9～10歳児であることが示された。

〈自閉症＝「心の理論」欠如仮説〉

「心の理論」のもう1つの重要な研究分野は自閉症児の発達である。ウタ・フリス、アラン・レスリー（現在はラトガーズ大学）、サイモン・バロン＝コーエン（現在はケンブリッジ大学）、フランススカ・ハッペラのMRC認知発達ユニットの研究グループと、サセックス大学のジョゼフ・パーナー及びケント大学のスー・リーカムらは、自閉症児が誤った信念課題に通過することが困難であり、彼らの障害が「心の理論」の欠如によるとする仮説を実験的に検証しようとしてきた (Frith, 1989; Happé, 1994; Happé & Frith, 1995; Baron-Cohen, 1995 参照)。

最初に、バロン＝コーエンら (Baron-Cohen, Leslie, & Frith, 1985) が非言語性知能検査ならIQ 82を示す自閉症児（生活年齢の平均が11歳11か月）でさえ、「誤った信念」課題の通過率が20%（20人中4人）にすぎないことを示した。なお、この実験はバロン＝コーエンの博士論文の研究として行なわれたものであり、「誤った信念」課題は「サリーとアンの課題」という形式に改められて実施された。

次いで、パーナーら (Perner, Frith, Leslie, & Leekam, 1989) は、非言語性知能検査での精神年齢が平均6歳2か月の自閉症児26人を対象にスマーティ課題を実施し、自閉症児がスマー

ティ課題に失敗しやすいことを明らかにした。

以上の結果から、この分野の研究者たちは、自閉症が「心の理論」モジュール（“theory of mind” module）を欠く認知障害であるという仮説を一応検証しえたとしている。

その後、バロン＝コーエンら（Baron-Cohen, 1991; Baron-Cohen, 1995; Leekam, Baron-Cohen, Perrett, Milders, & Brown, in preparation）は、「心の理論」の理解以前に合同注意の理解が重要であるとし、指さし（pointing）や視線方向（eye-direction）の研究を行なっている。すなわち、自閉症児は、他者の指さしや視線の動きについて、実験者から「私は何を言おうとしていますか」とか「私は何をしていますか」と尋ねられれば比較的正確に答えられるが、実験者が黙って指さしをしたりある方向を見つめたりする時にそれに追従することが困難であることが示唆されている。すなわち、自閉症児は、他者の意図に関する理解が欠けているので、他者の注意を正しくモニターすることができないとされるのである。

以上に示したように、「心の理論」研究は、現在のイギリスの発達心理学研究の重要なテーマの1つであり、世界の研究動向をリードするような論文が次々発表されている。ただし、イギリスの発達心理学研究は、ごく一般的に言うならば、どちらかというとアイディア先行型であり、厳密な実験条件の統制、十分な被験者数の確保、細かな統計的データ分析などの点で幾分問題があるものも見られ、得られたデータの確かさに疑義のあるものも存在するということを付言しておくなければならない。

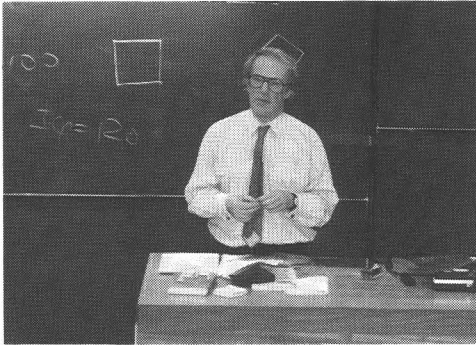
●イギリスのコンピュータ教育

イギリスの発達心理学研究についてのもう1つのテーマとして、コンピュータ教育の問題を取り上げよう。以前筆者は、子どもの思考と表現の道具としてのコンピュータの可能性について検討するために、アメリカのマサチューセッツ工科大学の数学者シーモア・パパート（Papert, S.）が開発したプログラミング言語 LOGO を用いたコンピュータ教育についての調査と研究を行ない、『幼児にもわかるコンピュータ教育』（子安, 1987）という本を書いた。LOGO 教育の研究の本場はもちろんアメリカであるが、そのような流れの中にあってイギリスのエクセター大学（University of Exeter）のマーティン・ヒューズ（Hughes, M.）が行なった、エディンバラのクレイグミラー地区の幼児を対象とするクレイグミラー LOGO プロジェクト（Craigmillar LOGO Project）は大変印象的であった（Hughes, 1986）。ヒューズは、もともと算数・数学教育に関心があり、LOGO 教育を通じて知的障害をもった子どもたちの数の理解力を向上させたいと考えて、この研究プロジェクトを立案し、実施したものである。クレイグミラー LOGO プロジェクトでは、5歳7か月から6歳5か月までの15人のやや知的能力が低い子どもたちを対象に、5か月間にわたって LOGO によるプログラミングを教えた。ヒューズの研究のユニークな点は、コンピュータへの入力装置として通常のキー配列のキーボード（QWERTY keyboard）の使用をしりぞけ、子どもが押しやすい大きなキーを、その時々により子どもが必要な分だけ用意し、学習の発展段階に応じてキーを付け加えていくという手法をとったことである。ヒューズによれば、LOGO 教育によって子どもたちに集中力と自信が生まれ、知能検査の中の積木検査、数唱、基本的数概念という3つの下位検査での成績が向上したという。

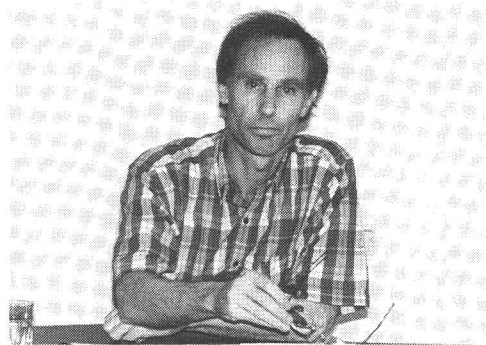
ヒューズの著作とほぼ同じ時期に公刊された、イギリスのコンピュータ教育の成果を示す本と

して、ジュリー・ラトコウスから (Rutkowska & Crook, 1987) 編の “*Computers, cognition and development*” がある。この本が取り扱っているテーマは、次の3つであった。

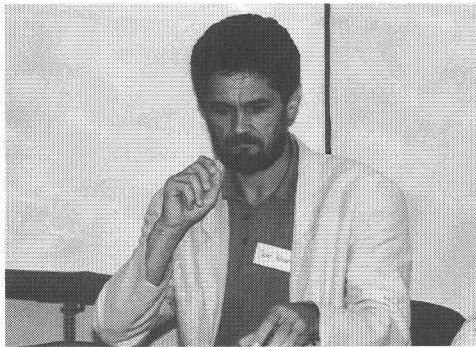
- (1) 情報テクノロジーの急速な拡大によって生じてきた問題、特に情報テクノロジーが心理的発達に及ぼす影響の問題を検討すること。
- (2) 人工知能の研究から生まれてきた洞察が、コンピュータを用いた新しい学習環境をどのように規定するかを明らかにすること。



a. ピーター・ブライアント



b. ポール・ハリス



c. ジョゼフ・パーナー



d. サイモン・バロン＝コーエン



e. スー・リーカム



f. ウシャ・ゴスワミ

図2 イギリスの発達心理学者の肖像（筆者撮影）

(3) たとえば「表象」や「計算」などのような、心的活動についての計算機のメタファーが、認知発達研究の理論の進歩にどのように貢献するかを調べること。

この本の執筆者はイギリスとアメリカの研究者19人であるが、その主体はサセックス大学とエクセター大学の心理学者たちである。すなわち、サセックス大学からは、ベネディクト・デュ＝ブーレイ (Du Boulay, B.), ジュリー・ラトコウスカ, マイクル・スケイフ, ジョージ・テイラー (Taylor, J.), ステファニー・ソーントン (Thornton, S.) の5人が参加し、エクセター大学からは、アン・ブラッケンリッジ (Brackenridge, A.), ジョナサン・ブリッグズ (Briggs, J.), ジャッキー・ディーン (Dean, J.), マーティン・ヒューズ, ジョン・ニコル (Nichol, J.), マスー・イヤズダニ (Yazdani, M.) の6人が執筆している。

4. イギリスの学会等の活動状況

●英国心理学会の現況

イギリスの発達心理学の研究者達は、英国心理学会に所属し、主としてその発達部門で研究活動を行なっていると考えられる。

この英国心理学会の会員は、1994年9月の時点で21,090人である（以下は、The British Psychological Society, “How to reach Psychologist”, 1994を参照した）。そのうち、外国会員と学生会員と賛助会員を除くと、メンバー数は16,040人となる。筆者は、発達心理学の研究者のリストが得たくて、英国心理学会の事務局に学会名簿の購入について尋ねたが、英国心理学会は名簿は内外ともに公開しない規約となっているために叶わなかった。これは、1つには会員のプライバシーの保護のためであり、もう1つは各種の広告資料を会員に配付したい者は、希望する分野の会員に有料で配付する制度があり、これが広告収入の財源となる、という理由によるものであるらしい。

次に、英国心理学会の研究分野別の会員数について見てみよう。科学研究の分野としての「セクション」の加入者は表2に示す通りである。なお、会員は複数のセクションに加入することが可能であり、約半数の会員が1つまたはそれ以上のセクションに加入している。表2より、「発達心理学」が3番目に大きなセクションであり、イギリスでは発達心理学が一応メジャーな分野

表2 英国心理学会のセクション別
人数分布表

セクション	人数
職業心理学	2307
社会心理学	951
発達心理学	808
教育	782
認知心理学	709
心理療法	622
女性心理学	592
心理生物学	248
スポーツ & 運動心理学	242
歴史 & 哲学心理学	236
数学・統計・コンピュータ	209

表3 英国心理学会のディヴィジョン別
人数分布表

ディヴィジョン	人数
臨床心理学	2815
カウンセリング心理学	1168
教育 & 児童心理学	1078
職業心理学	704
犯罪 & 法心理学	351
スコットランド地区教育 & 児童心理学	138

【出典】The British Psychological Society, “How to reach Psychologist”, 1994.

であることが分かる。

次に、大学院で訓練コースを受けた者のみが加入できる「ディヴィジョン」が6種類あり、そのディヴィジョン別の人数分布表を示したものが表3である。ディヴィジョンは、研究集団というよりも職能集団という性格が強い。ここでも「教育 & 児童心理学」が大きな分野となっている。なお、「スコットランド地区教育 & 児童心理学」が別組織になっているのも、いかにもイギリスらしいことである。

最後に、現在英国心理学会が発行しているジャーナル（専門雑誌）とその発行部数は以下の通りである。

<i>British Journal of Psychology</i>	2,900 部
<i>British Journal of Medical Psychology</i>	2,150
<i>British Journal of Developmental Psychology</i>	1,300
<i>British Journal of Social Psychology</i>	1,900
<i>British Journal of Clinical Psychology</i>	3,350
* <i>British Journal of Mathematical and Statistical Psychology</i>	700
<i>Journal of Occupational and Organizational Psychology</i>	2,680
<i>British Journal of Educational Psychology</i>	2,500
* <i>Legal and Criminological Psychology</i>	1,500

なお、*印を付した雑誌は年2回発行、その他の雑誌は年4回発行である。この表を見ると、“*British Journal of Developmental Psychology*”の発行部数は1,300部であり、発達心理学のアカデミック・スタッフが必ずしも多いとは言えないことが分かる。

●発達心理学の専門雑誌

イギリスの発達心理学者たちは、研究論文を専門雑誌に投稿する場合にイギリスの雑誌よりも“*Child Development*”, “*Developmental Psychology*”, “*Journal of Experimental Child Psychology*”などのアメリカの発達心理学雑誌に載せた方が世界的に認知されやすいことを残念な事実として認識している。それにもかかわらず、否、それだからこそ、彼らは“*British Journal of Developmental Psychology*”を1983年に創刊し、それを世界的に認知されうる優れた雑誌にすべく努力してきたのである。

この雑誌の初代編集長のピーター・ブライアントは、創刊号の「巻頭言」の中で、イギリスでは発達心理学は(1983年の時点で)過去20年の間に発展してきた新興の分野であり、当初は水準の高い論文が十分な数だけ集まるかどうかを懸念した、と率直に述べている(Bryant, 1983 a)。しかし、ブライアントは同時に、乳児の発達、認知発達、発達障害などの分野の最も優れた研究がイギリスの心理学者によってなされてきたことに触れ、トム・パウアー、マーガレット・ドナルドソン、マイクル・ラターらの名前をあげている。

また、この雑誌が世界に向けて情報を発信しようとする試みの代表的なものは、1991年の9巻の「心の理論」特集号であろう。この特集は、「心の理論」研究に関する20本の論文を掲載し、このテーマについて論ずる時に避けて通れないものとなっている。なお、この号の内容は単行本としても刊行されている(Butterworth, Harris, Leslie, & Wellman, 1991)。

また、これは余談であるが、“*British Journal of Developmental Psychology*”の編集長は、初代が上述のようにオックスフォード大学のピーター・ブライアント、二代目がサセックス大学のジョージ・バターワース（オックスフォード大学で学位取得）、三代目がオックスフォード大学のポール・ハリスと、なぜか歴代オックスフォード大学系の学者で占められてきた。

発達心理学を直接取り扱うものではないが、1980年に創刊されたイギリスの雑誌“*Personality and Individual Differences*”も知能の個人差などに関する論文が掲載されるので重要である。この雑誌の初代編集長は前出のハンス・アイゼンク（ロンドン大学教育研究所）であり、今年80歳になるアイゼンクは、現在も共同で編集長の席についている。

また、この雑誌の創刊号からの編集委員の1人でもある北アイルランドのアルスター大学教授リチャード・リン（Lynn, R.）は、知能の文化差の研究で知られ、日本の学校教育が「成功」した理由を分析した“*Educational achievement in Japan*”という本を書いている（Lynn, 1988; 子安, 1989 参照）。

●英国心理学会発達部門年次大会

次に学会発表関係の話題に移る。英国心理学会の発達部門は、英国心理学会発達部門年次大会（Annual Conference; Developmental Section of the British Psychological Society）という名称で毎年大会を開いている。

1994年の年次大会は、ポーツマス大学のヴァス・レディ（Reddy, V.）の主催により、夏季休暇中のポーツマス大学を会場に1994年9月1日～4日の4日間にわたって行われた。1994年は、ポーツマス市が1194年にリチャード一世（獅子心王）からロイヤル・チャーター（勅許状）を与えられてからちょうど800年、第二次大戦のDデー（ノルマンディー上陸作戦）の時に海軍基地として将兵を送り出してからちょうど50年という記念すべき年であり、そのことも学会開催の理由の1つのようであった。港町ポーツマスは、トラファルガーの海戦でのネルスン提督の旗艦であったHMS ヴィクトリー号が展示されるなど、海の歴史が豊かな町である。イギリスの大学では、夏休みは学生に寮を明け渡させ、部屋を簡易ホテル代わりに貸し出すところが多いが、ポーツマス大学での学会も参加者の宿舎はこのような学生寮の部屋が利用され、低料金で宿泊できるようになっていた。

この年の年次大会の参加者は、学会本部が配付した「会議参加者リスト」によると202名ということである。主な参加者は、エディンバラ大学のトレヴァーセン、ランカスター大学のサブツキー（Subbotsky, E.）、オックスフォード大学のブライアントとハリス、ロンドン大学MRC認知発達ユニットのフリスとハッペ、ケンブリッジ大学のラッセル、タヴィストック・クリニックのホブスン、サウサンプトン大学のライト、サセックス大学のユイル（Yuille, N.）とラトコウスカ、それにアメリカ合衆国からは、スミス・カレッジのピュフォール（Pufall, P. B.）とエモリー大学のトマセロ（Tomasello, M.）といった顔ぶれである。

発達部門年次大会は、トマセロほかの講演、シンポジウム、個別研究の口頭発表、およびポスター発表（大学院生のみ）の4本立てとなっていて、形式の点では日本の心理学関係の学会と大きく異なるところはない。この年のシンポジウムは、次の6つであった。

「文化心理学への（脱）構成主義的アプローチ」

「子どもの目撃証言はミスリードされやすいか？」

「推論と論理の発達」

「初期の文法発達における制約的分布学習」

「自閉症児において心の理論は他の発達要因とどのように相互作用するか？」

「発達初期のディケアと関連する子どもの発達」

●英国心理学会ロンドン会議

英国心理学会は、毎年12月に「ロンドン会議 London Conference」を開催している。1994年度は、ロンドン大学教育研究所で12月19日～20日の2日間にわたってこのロンドン会議が開催された。参加者は、学会本部の「出席者リスト」によると372名であった。ロンドン会議は、講演、シンポジウム、個別研究の口頭発表、ポスター発表、ワークショップの5本立てである。

講演は、セント・アンドリュース大学のデイヴ・ペレット (Perrett, D.) による「顔の理解」と、ケンブリッジ大学のジョナサン・ドライヴァー (Driver, J.) によるスピアマン・メダル受賞記念講演「注意とセグメンテーション」の2本であった。ペレットは、髪を左半分を赤く染め、サイケデリックな上衣に銀色のネクタイと、さながらロック・ミュージシャンのようないでたちだが、内容は脳波を用いて顔の認知を調べる堅実なもので、美人顔をポッチェリ型とルノワール型に分類するなど才気溢れる話しぶりだった。他方、ドライヴァーはトラディショナルな服装で現れたが、こちらは若手研究者の最初の10年間の業績に対して与えられるスピアマン・メダル（日本教育心理学会の城戸奨励賞のようなもの）を受賞しての講演で、刺激図形のセグメンテーションが見え方にどのような効果を与えるかを調べる視知覚研究の話であった。

ロンドン会議のシンポジウムには、次の12本のタイトルがあった。

「正常で健康な老年期の認知能力の変化」

「女性と労働の研究の多様なアプローチ」

「不妊と生殖技術の心理学的側面」

「催眠——理論、研究、実践」

「スポーツ、運動、健康における心理学の役割」

「差別——研究と実践」

「行政における応用心理学の諸例」

「戦争は続いている——第二次大戦の心理的傷痕」

「枠組みを再編される組織——変化の管理の中の職業心理学者」

「教育と職業における性差の問題」

「精神健康サービスを变えるためのユーザーとの協力」

「自己なき心——仏教の認知科学への影響」

既に見たように、イギリスの心理学は応用重視の立場をとるが、そのことはこのシンポジウムのタイトルからも窺い知れよう。筆者は、この中で「戦争は続いている——第二次大戦の心理的傷痕」に出席した。第二次大戦中、直接戦闘行為に参加したり、POW (prisoner of war, 戦時捕虜) を経験したベテラン、イギリス国内でドイツ軍による空爆を体験した主婦などが、現在も戦争時の体験を心理的傷痕として持ち続けていることをインタビューによって調べた研究を集め

たシンポジウムである。ドイツ軍の捕虜になった者に比べて、日本軍の捕虜を体験した者は、栄養失調とその結果としての極度の低体重を体験したため、現在も体調に異常のある者が多く、捕虜虐待による心理的傷痕も大きいという、日本人にはその場に居るのがつらい発表であった。

個別発表の中には、発達心理学的研究がいくつかあったが、ポーツマス大学での発達部門年次大会にくらべると質・量ともに少なかった。また、ワークショップが2つあったが、そのうちの1つは児童用非言語知能検査の使い方に関するものであった。

●国際シンポジウム「心の理論の理論」

「心の理論」研究に密接に関連することとして、1994年7月13日～16日にシェフィールド大学を会場にして「心の理論の理論 Theories of theories of mind」というシンポジウムが開催された。主催者は、シェフィールド大学のハン・セン認知研究センター (The Han Seng Centre for Cognitive Studies) 教授のピーター・カラザーズ (Carruthers, P.) であった。シンポジウムは、その初日に国鉄 (Brit Rail) の鉄道ストライキが行なわれるという悪条件下でスタートしたが、参加者は主催者側作成の「出席者リスト」によると98名であり、シンポジウムの発表取消も1件もなく順調に進行した。

このシンポジウムの目的を主催者の宣伝文から引用すると、次のようであった。

◆「心の理論」を持つとはどういうことか?

(シミュレーション説 v.s. 理論説)

◆どのように「理論」が獲得されるのか?

(想像的投影 v.s. 小さな科学者としての子ども v.s. 生得的心の理論モジュール)

◆明瞭な獲得の失敗

(自閉症)

◆進化の視点

(チンパンジーは「心の理論」を持つか?)

というテーマに関する学際的会議。

このシンポジウムは、第1に、哲学、心理学 (幼児研究、自閉症児研究)、霊長類学という異なる分野の研究者が一堂に会する学際的会議という特徴を備えていた。第2に、これは国際的シンポジウムであり、イギリスだけでなく、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、スペインからも発表者があった (表4参照)。

このシンポジウムの第1の論点は、「心の理論」の理論説 (theory theory) とシミュレーション説 (simulation theory) のどちらがより妥当な解釈か (この点については、松村, 1994 の解説参照) という解釈学的論争であった。理論説よりもシミュレーション説の方が説明力が大きいとす代表が哲学のグレッグ・カーリー (Currie, G.), 他方、理論説擁護の立場の代表はアリスン・ゴブニック (Gopnik, A.) であった。しかしながら、どちらの解釈が正しいかを決定する新しい研究方法が示されたわけではなく、いわば「神学的論争」に終始した感があった。

第2の論点は、「心の理論」のモジュール性 (modularity of "theory of mind") についてで

表4 国際シンポジウム「心の理論の理論」の発表者と発表日程

1994 年 7 月 13 日	セッション 1	1	Robert Gordon (St. Louis-Missouri, USA)
		2	Josef Perner (Sussex)*
		3	Jane Heal (Cambridge)
		4	Stephen Stich (Rutgers, USA) Shaun Nichols (Charleston, USA)
14 日		5	Gabriel Segal (King's London) Simon Baron-Cohen (London)*
		6	Janet Astington (Toronto, Canada)*
		7	Alison Gopnik (California at Berkeley, USA)*
		8	Ned Block (MIT, USA)
15 日		9	George Botterill (Sheffield)
		10	Andrew Woodfield (Bristol) Clive Witcomb (Sheffield)
		11	Norman Freeman (Bristol)*
		12	Charles Lewis (Lancaster)*
16 日		13	Adam Morton (Bristol)
		14	Paul Harris (Oxford)* Jill Boucher (Sheffield)*
		15	Gregory Currie (Flinders, Australia) Peter Carruthers (Sheffield)
		16	Juan Carlos Gomez (Madrid, Spain)*
		17	Daniel Povinelli (Southwestern Louisiana, USA)* Peter Smith (Sheffield)*

【註】肩の*印は心理学の研究者であることを示す。国籍のない大学はイギリス。

あった。これは、「心の理論」が他の心的機能とは相対的に独立した機能を持つかどうか、という議論である。これについては、ガブリエル・シーガル (Segal, G.) がモジュールの定義を5種類に分類し、「心の理論」がどの定義に該当するかを論じた。しかし、5種類のモジュールの分類の妥当性が十分に示されたとは言い難い。

第3の論点は、自閉症が「心の理論」の欠如で説明できるかどうかである。この点については、サイモン・バロン＝コーエンとジル・パウチャー (Boucher, J.) の2つの発表が聴衆を引きつけたように思われた。

バロン＝コーエンの発表は、共有注意機構 (shared attention mechanism ; SAM) から「心の理論の機構」 (theory of mind mechanism ; ToMM) への発達という方向性を示し、自閉症児が誤った信念課題に通過しないだけでなく、宣言的指差しを理解しないことが重要であると主張している。この時のバロン＝コーエンの発表内容は、その後 "*Mindblindness*" (Baron-Cohen, 1995) にまとめられている。

ヴァウチャーの発表では、自閉症児のビデオ映像を示しながらその症状の多様性について述べた後、1940年代の「冷蔵庫のように冷たい母親 (refrigerator mother)」が自閉症の原因とされた時代から「心の理論」欠如仮説へと発展してきた自閉症研究の歴史的経緯に触れつつ、「心の理論」欠如仮説よりも合同注意の欠如の方が説明力が大きいとしている。

最後の論点は、霊長類研究の成果に関するものであり、スペインのファン・カルロス・ゴメス (Gomez, J. C.) とアメリカのダニエル・ポヴィネリ (Povinelli, D.) の2人が発表した。

ゴメスは、人間以外の霊長類について、

(a) 知ることや信ずることをするか？

(b) 他者の「外的」な心的状態（注意）を理解するか？

(c) 他者の「内的」な心的状態（知識）を理解するか？

という3つのポイントについて調べた。その結果、(a)については、対象物の永続性（隠されたものを探そうとする）がゴリラにも理解できること、(b)については合同注意の重要性、(c)についてはゴリラが宣言的ジェスチャーを理解しないこと、などが示された。

他方ボヴィネリは、若いチンパンジーを実験的に観察し、彼らが、

(a) 他の動物の凝視を追跡するアルゴリズムを発達させること、

(b) 顔と眼の布置と、それに続くできごとについての規則を理解すること、

を示した。しかし、このような行動が何らかの意図に基づくものであるということの証拠はまだ得られていないという結論であった。

以上のように、このシンポジウムにおいて何か特に新しい理論なり方法論なりが提出されたわけではないが、霊長類研究、幼児発達研究、自閉症児研究の3領域の研究者が有機的に議論しあえる場が提供されたことは大変意義深いことであった。なお、本シンポジウムの詳しい内容は、ケンブリッジ大学出版局より1996年刊行予定とのことである。

5. 終 わ り に

イギリスの心理学は、哲学における心の探究の長い歴史と伝統の故に、現代科学の1つとして脱皮する際に産みの苦しみを味わった。しかし、確立された研究領域の1つとなった心理学は、現在では哲学の伝統を生かした研究が展開できるようになっている。イギリスの発達心理学の研究を理解する上で、この「哲学の伝統」という観点は無視できない点である。

また、イギリスの心理学は、ジェローム・ブルーナーの招聘に見られるように、各大学が「外部の血」を積極的に導入することによって発展してきた。このことは、日本の心理学の今後の展開を考える上で重要な視点である。

他方、イギリスからアメリカへの頭脳流出の問題がある。選択的注意の研究で1990年のアメリカ心理学会賞を得たアン・トライスマン (Treisman, A.) はオックスフォード大学からアメリカに移り、現在はカリフォルニア大学バークレー校の教授である。また、「4枚カード問題」や「メンタルモデル」で知られるフィリップ・ジョンソン＝レアード (Johnson-Laird, P. N.) はケンブリッジ大学 MRC 応用心理学ユニットからプリンストン大学に移籍した。自閉症児の「心の理論」の研究者アラン・レスリーも MRC 認知発達ユニットからラトガーズ大学へ研究の中心を移している。しかし、このようなことはイギリスの心理学にとって決してマイナスではないかも知れない。なぜなら、既に詳しく見たように、イギリスからアメリカに移ったウィリアム・マクドゥーガルが、直接的な学問的影響は少ないとは言え、ジェローム・ブルーナーを育て、そのブルーナーがイギリスの心理学の発展に尽くすという循環的交流の歴史があるからである。こういった英語圏での自由な交流は、閉鎖的な日本の人事交流を考えると羨ましい限りである。

現在、発達心理学の研究を行なおうとするならば、「心の理論」の分野に限らず、イギリスの研究動向から目が離せない。アメリカのように発達心理学の研究者人口が大きくないにもかかわらず、小さくても立派に光っているのがイギリスの発達心理学研究であると言える。

文 献

- Anderson, M. 1992 *Intelligence and development*. Blackwell.
- 安藤洋美 1989 統計学けんか物語——カール・ピアソン一代記. 海鳴社.
- Baddeley, A., & Weiskrantz, L. 1993 *Attention: Selection, awareness, and control*. Clarendon Press.
- Baron-Cohen, S. 1991 Precursors to a theory of mind: Understanding attention in others. In A. Whiten (Eds.), *Natural theories of mind*. Blackwell, pp. 233–251.
- Baron-Cohen, S. 1995 *Mindblindness: An essay on autism and theory of mind*. The MIT Press.
- Baron-Cohen, S., Leslie, A., & Frith, U. 1985 Does autistic child have a “theory of mind”? *Cognition*, 21, 37–46.
- Boden, M. 1979 *Piaget*. Fontana. 波多野完治（訳）ピアジェ. 岩波書店, 1980.
- Boden, M. 1989 *Artificial intelligence in Psychology*. The MIT Press.
- Bower, T. G. R. 1989 *The rational infant: Learning in infancy*. W. H. Freeman and Co. 岩田純一・水谷宗行他訳, 賢い赤ちゃん——乳児期における学習. ミネルヴァ書房, 1995.
- Bremner, J. G. 1988 *Infancy*. Blackwell.
- Broadbent, D. E. 1958 *Perception and communication*. Pergamon Press.
- Bruner, J. 1983 *In search of mind: Essays in autobiography*. Harper & Row. 田中一彦訳, 心を探して——ブルーナー自伝. みすず書房, 1993.
- Bryant, P. E. 1983 a Editorial. *British Journal of Developmental Psychology*, 1, 1–2.
- Bryant, P. E. 1983 b Editorial: The passing of the MRC Developmental Psychology Unit. *British Journal of Developmental Psychology*, 1, 303–306.
- Bryant, P. E. 1995 Jean Piaget (1896–1980). In Fuller, R. (Ed.), *Seven pioneers of Psychology: Behaviour and mind*. Routledge.
- Butterworth, G. E., Harris, P. L., Leslie, A. M., & Wellman, H. M. 1991 *Perspectives on the Child's theory of mind*. Oxford University Press.
- Byrne, R. 1995 *Thinking ape*. Oxford University Press.
- Byrne, R., & Whiten, A. 1988 *Machiavellian intelligence: Social expertise and the evolution of intelligence in monkeys, apes, and humans*. Clarendon Press.
- Clements, W., & Perner, J. 1994 Implicit understanding of belief. *Cognitive Development*, 9, 377–395.
- Cox, M. V. 1980 *Are young children egocentric?* Batsford Academic.
- Cox, M. V. 1991 *The Child's points of view*. Harvester Wheatsheaf.
- Cox, M. V. 1993 *Children's drawings of the human figure*. Lawrence Erlbaum Associates.
- Flanagan, C. 1994 *A level psychology*. Letts Educational.
- Frith, U. 1989 *Autism: Explaining the enigma*. Blackwell. 富田真紀・清水康夫（訳）自閉症の謎を解き明かす. 東京書籍, 1991.
- Gardner, H. 1985 *The mind's new science: A history of the cognitive revolution*. Basic Books. 佐伯 胖・海保博之（監訳）認知革命——知の科学の誕生と展開. 産業図書, 1987.
- Goswami, U. 1992 *Analogical reasoning in children*. Lawrence Erlbaum Associates.
- Gregory, R. L. 1970 *The intelligent eye*. Weidenfeld & Nicolson. 金子隆芳訳, インテリジェント・アイ——見ることの科学. みすず書房, 1972.
- Grieve, R., & Hughes, M. 1990 *Understanding children: Essays in honour of Margaret Donaldson*. Blackwell.
- Happé, F. 1994 *Autism: An introduction to psychological theory*. UCL Press.
- Happé, F., & Frith, U. 1995 Theory of mind in autism. In E. Schopler, & Mesibov, G. B. (Eds.), *Learning and cognition in autism*. Plenum Press, pp. 177–197.
- Harris, P. L. 1989 *Children and Emotion: The development of psychological understanding*. Blackwell.
- Harte, N., & North, J. 1991 *The world of UCL: 1828–1990*. University College London.
- Hobson, R. P. 1993 *Autism and the development of mind*. Lawrence Erlbaum Associates.

- Hughes, M. 1988 *Children and number: Difficulties in learning mathematics*. Blackwell.
- 今田 恵 1962 心理学史. 岩波書店.
- Johnson, M. H., & Morton, J. 1991 *Biology and cognitive development: The case of face recognition*. Blackwell.
- Karmiloff-Smith, A. 1992 *Beyond modularity: A developmental perspective on cognitive science*. The MIT Press.
- 子安増生 1987 幼児にもわかるコンピュータ教育——LOGO プログラミングの学習. 福村出版.
- 子安増生 1989 文献紹介: リチャード・リン著『日本の教育達成——西欧への教訓』. IDE 現代の高等教育, No. 301, 53-59.
- 子安増生 1990 幼児の空間的自己中心性 (I) ——Piaget の 3 つの山問題とその追試研究——. 京都大学教育学部紀要, 第 36 号, 81-114.
- 子安増生 1991 幼児の空間的自己中心性 (II) ——Piaget の 3 つの山問題の関連実験と理論的考察——. 京都大学教育学部紀要, 第 37 号, 124-153.
- Leekam, S., Baron-Cohen, S., Perrett, D., Milders, M., & Brown, S. (in preparation) *Eye direction detection: A dissociation between geometric and joint attention skills in autism*.
- Lynn, R. 1988 *Educational achievement in Japan*. MacMillan Press.
- 松村暢隆 1994 幼児の〈心の理論〉と理論説—模擬説との議論について. 心理学評論, 37, 92-107.
- Meltzoff, A. N., & Moore, M. K. 1977 Imitation of facial and manual gestures by human neonates, *Science*, 198, 75-78.
- Millar, S. 1994 *Understanding and representing space: Theory and evidence from studies with blind and sighted children*. Clarendon Press.
- 野村庄吾 1984 スコットランドの小さな学校——子どもの福祉と教育. 岩波書店.
- 荻阪良二 1957 イギリスの心理学会——B. P. S. と E. P. G. ——. 心理学評論, 1, 300-306.
- Perner, J. 1991 *Understanding the representational mind*. The MIT Press.
- Perner, J., Frith, U., Leslie, A., & Leekam, S. 1989 Exploration of the autistic child's theory of mind: Knowledge, belief, and communication. *Child Development*, 60, 689-700.
- Perner, J., Leekam, S.R., & Wimmer, H. 1987 Three-year-olds' difficulty with false belief: The case for a conceptual deficit. *British Journal of Developmental Psychology*, 5, 125-137.
- Perner, J., & Wimmer, H. 1985 "John thinks that Mary thinks that...": Attribution of second-order beliefs by 5- to 10-year old children. *Journal of Experimental Child Psychology*, 39, 437-471.
- Piaget, J., & Inhelder, B. 1948 *La représentation de L'espace chez l'enfant*. PUF. (Translated by F. J. Langdon, & J. L. Lunzer, "The child's conception of space". Routledge and Kegan Paul, 1956.)
- Premack, D., & Woodruff, G. 1978 Does the chimpanzee have a theory of mind? *The Behavioral and Brain Sciences*, 1, 515-526.
- Rutkowska, J. C. 1993 *The computational infant: Looking for developmental cognitive science*. Harvester Wheatsheaf.
- Rutkowska, J. C., & Crook, C. 1987 *Computers, cognition, and development: Issues for psychology and education*. John Wiley and Sons.
- Scaife, M., & Bruner, J. 1975 The capacity for joint visual attention in the infant. *Nature*, 253, 265-266.
- Sloboda, J. A. 1983 Neil O'Connor and the MRC Developmental Psychology Unit. *British Journal of Developmental Psychology*, 1, 405-408.
- The Association of Graduate Careers Advisory Services 1993 *What do graduates do?* Hobsons Publishing.
- Whiten, A. 1991 *Natural theories of mind: Evolution, development and simulation of everyday mindreading*. Blackwell.
- Wimmer, H., & Perner, J. 1983 Beliefs about beliefs: Representations and constraining function of wrong beliefs in young children's deception. *Cognition*, 13, 103-128.